

## シヅム「沈」とシヅム「鎮」

——金田一法則から見る——（上）

蜂矢真郷

『時代別国語大辞典上代編』（以下、『上代編』と示す）に、次のようにある。

しづむ「沈」（動四）次項シヅム（下二段）に対する自動詞。①沈む。水に沈む。

「没溺、上沈也、下訓沈、正為<sup>二</sup>弱字、倭言之豆牟<sup>一</sup>」（華嚴音義私記）「難波潟潮干なありそね沈にし妹が光儀を見まく苦しも」（万二二九）「又沈<sup>二</sup>濯<sup>一</sup>於海底、因以生神号曰<sup>二</sup>底津少童命<sup>一</sup>」（神代紀上）②鎮まる。静かになる。↓前項。「あり衣のさゝさゝる之豆美家の妹に物言はず来にて思ひ苦しも」（万三四八一）「荒し男のいをさ手挟み向ひ立ちかなる間之都美出でてと我が来る」（万四四三〇）「珠衣のさゝるさゝる沈家の妹にもいはず来にて思ひかねつも」（万五〇三）③沈潜する。「古りにし姫にしてやかくばかり恋に沈む手童のごと」（万二一九）「忽沈<sup>二</sup>疝疾<sup>一</sup>、累旬痛苦（万三九六五序）「沈<sup>二</sup>重病<sup>一</sup>」（古文書一四、天平宝字二年）「身沈<sup>二</sup>疹病<sup>一</sup>」（古文書四、天平宝字二年）【考】（「沈痾自哀文」について、略）②の「前項」は「しづまる」「鎮」（動四）、「後掲」

しづむ「沈・鎮」（動下二）前項シヅム（四段）に対する他動詞。①沈める。水に沈める。「内彦<sup>レ</sup>彦火出見尊於籠中<sup>一</sup> 沈<sup>二</sup>之于海<sup>一</sup>」（神代紀下）「飄風忽起、引匏<sup>レ</sup>没<sup>レ</sup>水」（仁徳紀一年）「汝沈<sup>二</sup>是瓠<sup>一</sup> 則余避之、不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>沈者、仍斬<sup>二</sup>汝身<sup>一</sup>」（仁徳紀六七年）②鎮まらせる。静める。シヅマル（四段）に対する他動詞。「御心を斯豆迷給ふと」（万八一三）「種々大御手津物彼神進、屋波志志豆目平奉<sup>レ</sup>詔遣下給<sup>支</sup>：其神<sup>平</sup>夜波志々都米上奉<sup>天</sup>劳祀<sup>支</sup>」（倭姫世紀）「真木柱太き心はありしかどこの吾が心鎮目かねつも」（万一九〇）「しづ宮に忌ひ静<sup>米</sup>仕へ奉りて」（祝詞出雲国造神賀詞）「遂得<sup>三</sup>安<sup>二</sup>定区<sup>一</sup>字<sup>一</sup>」「以鎮<sup>二</sup>元元<sup>一</sup>」（神武前紀）「己命之御魂鎮置給之」（出雲風土記飯石郡）

右の四段動詞は自動詞、下二段動詞は他動詞である。上代にこうした組合せとなる動詞は、釘貫亨氏『古代日本語の形態変化』[1996.10 和泉書院]「第三部第一章、もと「上代語における自他对形式の史的展開」『国語論究』2 [1990.1 明治書院]」が挙げられるように多く、マ行動詞に限っても、別稿「上代を中心とするバ行動詞とマ行動詞」（『萬葉』231 [2021.3]）に見たように、『上代編』に項のあるものでシヅム「沈／鎮」の他に15組がある。

それに加えて、自動詞で沈む意と鎮まる意とを分け、他動詞で沈める意と鎮める意とを

分ける方が、よりよいのではないだろうか。そのようにしてみると、次のようになる。

しづむ「沈」(動四)シヅム「沈」(下二段)に対する自動詞。①沈む。水に沈む。

(用例、略)②沈潜する。(用例、略)【考】「沈痾自哀文」について、略) (元

「しづむ」沈」(動四)の①③

しづむ「鎮」(動四)シヅム「鎮」(下二段)に対する自動詞。鎮まる。静かにな

る。(用例、略) (元「しづむ」沈」(動四)の②

しづむ「沈」(動下二)シヅム「沈」(四段)に対する他動詞。沈める。水に沈め

る。(用例、略) (元「しづむ」沈・鎮」(動下二)の①

しづむ「鎮」(動下二)シヅム「鎮」(四段)・シヅマル(四段)に対する他動詞。

鎮まらせる。静める。(用例、略) (元「しづむ」沈・鎮」(動下二)の②

このように、自動詞「四段」と他動詞「下二段」とを分ける上に、沈む・沈める意と鎮まる・鎮める意とを分けることにより、意味の違いはかなりわかりやすくなると言える。

ここで、アクセントについての金田一法則を見ておくことにしたい。

金田一春彦氏(一)「現代語方言の比較から見た平安朝アクセント——特に二音節名詞に就て——」(方言)7-6 [1937.7]・(二)「類聚名義抄和訓に施されたる声符に就て」(『日本語音韻学調史の研究』[2001.1 吉川弘文館]「第二編二、もと橋本博士還暦記念会『国語学論集』[1944.10 岩波書店]」)・(三)「国語アクセント史の研究が何に役立つか」(『日本語音韻学調史の研究』「前掲」「第三編一、もと『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』[1953.5 三省堂])は、古代語のアクセントについて述べられていて、とりわけ、同氏(三)に、

《ある語が高く始まるならば、その派生語・複合語もすべて高く始まり、ある語が低く始まるならば、その派生語・複合語もすべて低く始まる》

とまとめられ、金田一法則と呼ばれる。

実は、『類聚名義抄』(以下、『名義抄』と示す)の声点を見ると、

沈シヅム(上上) (図二一) 潜シヅム(上上) (図二二)

鎮シヅム(平平東) (観僧上一三七「70才」) 靖シヅメタリ(平平東〇〇) (図二二六)

とある(「上」は上声「高いアクセント」、「平」は平声「低いアクセント」、「東」は平声軽「下がるアクセント」、「〇」は声点なし、「上」「平」の右傍線は双点「濁音」、「図」は図書寮本、「観」は観智院本を表し、また、「図」の訓に付された小漢字は出典で、「記」は史記か「日本書紀かとも」、「白」は白氏文集を表す)。

つまり、シヅム「沈」は高く始まる高起式、シヅム「鎮」は低く始まる低起式であり、両者は別語と見るのがよいことになる。四つの項を立てることの意味が、ここにある。

右の四つの項のうちのシヅム「鎮」「下二段」が動詞化接尾辞を伴って派生したととらえられるものに、シヅマル「鎮」「四段」がある。シヅマル「鎮」は自動詞であるので、他動詞シヅム「鎮」「下二段」に対する自動詞に、形態の異なるシヅム「鎮」「四段」とシヅマル「鎮」とがあるということである。とすると、このシヅム「鎮」「四段」とシヅマル「鎮」とは、表す意味が少しく異なるということになるのではないかと考えられよう。『上代編』に、シヅマル「鎮」は次のようにある。

しづまる「鎮」(動四) 静かになる。一定の場所に落着く。神が鎮坐する意に用いることが多い。シヅム(下二段)②に対する自動詞。「朝裳よしきのへの宮を常宮と高くしまつりて神ながら安定ましぬ」(万一九九)。「如此歌、即為二字伎由比而、宇那賀氣理互、至今鎮坐也」(記神代)。「拆久志呂五十鈴宮鎮理定理給止国保伎給支」(倭姫世紀)。「国内漸謐」(謐志津末留)。(崇神紀七年・私記丙本)「時父神聞而奇之、乃設八重席二迎入、坐定因問二来意」(神代紀下)。「八雲立出雲国者、我静坐国」(出雲風土記意宇郡)。「寂シヅカナリ、シヅマリニタリ」(名義抄)

実のところ、上代におけるシヅマル「鎮」の意味は、「静かになる。一定の場所に落着く。神が鎮坐する意に用いられることが多い。」とするよりは、神霊が一定の場所に落着く。国内が静かになる。意という、特定の意を表すととらえるのがよく、それに対して、鎮まる意は、一般的にシヅム「鎮」「四段」が表すというように、使い分けられているかと考えられる。なお、平安初期のシヅマル「鎮」には、「掛畏支大菩薩如故尔安穩尔静坐天」(文徳実録・斉衡二[895]年九月宣命)「掛けまくも畏支大菩薩故の如く尔安らけく穩尔静坐天」のように、「神霊が」と言うより「仏が」とするのがよいと見られる例もある。

それが、平安中期以降には、「宵のましづまりたるに」(蜻蛉日記)、「人も寝しづまりにければ」(皆人々しづまりぬるをりに)『落窪物語』などのように、「人」「人々」などが『蜻蛉日記』の例には、その前に「いみじうさわぐ」とある)、鎮まる意というよりは静まる意に用いられるようになって行ったものと見られる。

『上代編』に挙げられる例にも、「国内漸謐」(『日本書紀』卷五・崇神天皇七年・熱田本)「国内は漸くに謐まりぬ。」のように、「国内が静かになる」意の例があるけれども、下ると「人」「人々」などが静かになる意に拡大して行ったと見てよいであろう。『蜻蛉日記』には、「雨いたくふり、神いといたくなるを、胸ふたがりてなげく。すこししづまりて」のように雨・雷が静まる例もあり(この方が「神霊が一定の場所に落着く」意に近い)、何が静まるかという範囲が、次第に広くなって行ったと考えられる。

一方、シヅマル「鎮」が意味を拡大しよく用いられるようになったのに対して、シヅム「鎮」「四段」はほぼ用いられなくなって行ったと見られる。例えば、宮島達夫氏等『日本古典対照分類語彙表』[2014.6 笠間書院]に、「動下二」の「しづむ」は「鎮・沈」とあるのに対して、「動四」の「しづむ」は「沈」とのみある。

また、シヅム「鎮」からシヅマルが派生するのに対して、シヅム「沈」が動詞化接尾辞を伴って派生したととらえられる例は、上代・中古に見当たらず、近代まで下っても、シヅマス「沈」「四段」があるぐらいであろう(永井荷風「野心」二に「さうね。」と云ったが、猶顔を沈まして居る。)の例がある)。

『日本国語大辞典』(第二版・精選版)「小学館」は、「しず・めるめしづ【鎮・静】(「他マ下一」)文しづ・む(「他マ下二」)の項に「沈める」と同語源」とあり、アクセントを考慮に入れないと見られる。また、『岩波古語辞典』(初版・補訂版)「岩波書店」は、「用語」について「アクセント」の欄があり、金田一法則と記していないがそれに基づいた内容を説明しているので、アクセントを考慮に入れてははずであるけれども、「しづ・め【沈め・鎮め】(「下二」)の項で、**①**《シヅミ(沈)の他動詞形。「浮かべ」の対》と**②**《シヅマリ(鎮)の他動詞形。活動しているものの動きを沈静させる意》とを括っている。ここではアクセントを考慮して見ないとも見られる。

なお、金田一法則について、金田一氏(四)「去声点ではじまる語彙について——本誌第90集所載の望月郁子氏の論文を読んで——」(『国語学』93 [1973.6])に、金田一氏自身が、「私の法則を破る例外的な事実」の一つとして、次のことを挙げられている。

動詞「明く」が上平型であるのに、いわゆる形容動詞の「明らか」は平平上平型であるのは変ではないか。(略)「○○らか」「○○やか」という形の形容動詞の語幹が、原則として平平上平型であるので、その型に類推してそうなったものであろう。

実際に、カ・ヤカ(ヨカ)・ラカ(ロカ)を末尾に持つ形容動詞語幹は、三音節では上平、四音節では平平上平、五音節では平平上平上平であって、金田一法則の例外である。

よって、シヅカ「静」は、「謚シヅカナリ(後平上平○○)」「『名義抄』図九九、「後」は後漢書)のように低起式であるが、これは高起式のシヅム「沈」とともにとらえられないことを意味しない。とは言っても、鎮まる意と静まる意との連続性から見ると、シヅカ「静」はシヅム「沈」よりシヅム「鎮」とともにとらえる方がよいであろう。

(「下」に続く)